
レンタルフェイス

めくじら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レンタルフェイス

【Nコード】

N7676A

【作者名】

めくじら

【あらすじ】

4年ぶりの再会から始まる。どのジャンルかわからない、その他ストーリーです。

偽りの過去

午後7時、大学から帰宅の途に着く折に、地元の数少ない友人であり

元彼女である三國小夜子に出会った。

彼女は明るく、天真爛漫な性格で、私の常識と照らし合わせるなら間違いなく美人と言えた。

そんな小夜子と付き合えたのは全くの偶然だった。

中学ではほとんど会話のなかった二人が、高校に上がると同時に仲良くなり始めた。

一見不自然だが、私たちに選択の余地はなかった。

高校は地元から電車で二時間かけたところにあり、同じ中学からこの高校に進学したのは、私と小夜子だけだった。

知り合いは小夜子だけ、もちろん小夜子にしても同じだった。

いや、小夜子は私のことなど、知りもしていなかったかもしれない。

しかし、話し相手という救いを求めて私たちは仲良くなっていった。

一種のつりばし効果というやつだろうか。そのある種の怪奇に根ざした現象は、奥手な私に小夜子を与えた。

ある日のこと、小夜子は私に告白した。

本来ならばなんの特徴もない私など相手にしないであろう人種が私に告白したのだ。

私は自分が人生の絶頂にいると確信した。

有頂天になり電車の中で小夜子と話すときは、
ありもしない優越感を周りの男達にぶつけていたし、
高校のクラスメートとの会話でも口について出てくるのは小夜子の
ことばかりだった。

そして、大した問題を抱えることもなく二人の関係は進み、
付き合ってから二年が過ぎた頃だったろうか、私は小夜子に別れを告げ
た。

特に理由はなかった。

今考えてもあの時の行動は理解できない。

別れを告げた瞬間も、私は小夜子を愛していたのだ。

小夜子は何も言わずにうなずくと、涙を拭った手の平で自分の頭を
軽く小突き、卑怯な私に精一杯の笑顔を送った。

それ以来、小夜子とは一度も話す事がないままに高校を卒業して
しまった。

私は高校卒業と共にその苦い記憶を封印して生きてきた。

それが、別れてから4年の月日が経過した今になって、小夜子と
の再会によって

私の傑作であるはずの封印は、まるで初めからなかったかのように
消えうせていた。

悲運なる再会

駅のホームで同時に二人は互いを見つけた。

私はすぐに小夜子だとわかった。無性に声をかけたい気持ちに駆られたが、

小夜子が私だと気づいているかどうかかわからず、ただ黙って小夜子を見ていた。

「久しぶりだね」

彼女は迷わずに言った。

「どうしてここにいるの」

話しかけられると途端に我を忘れた私は、最低の質問をやったのけた。

家が近いのだから彼女が駅にいたってまるで不思議はない。

「新一君変わってないね」

彼女は少し困ったような笑みを見せて答えた。

「三國さんも昔のままだ」

しかし、実際の所、昔の天真爛漫な彼女は心なしか影をひそめ、どことなく顔もやつれたように思えた。

「よしてよー、『三國さん』だなんて。私だけ新一君って呼んでさ、なんだか私バカみたいじゃん！」

手を小さく振って、私の目を覗き込むようにした。

「昔のように小夜子って呼んでよ」彼女の無理をしている感じが伝わった。

居づらくなった。

こうなるといつも、理由をつけて逃げてきた。

今日は・・・逃げてもいいのだろうか。

「どうしたの新一君、久しぶりだから話しづらい？」

彼女は私がどう反応するのかを見守った。

「い、いや、違うんだ。久しぶりに会えてうれしいよ」

私は何を言っているんだろう、まさかよりが戻ることを期待しているのだろうか。

彼女はしばらく何かを考えているそぶりを見せ、いたずらに目を輝かせて、私に向き直った。

「新一君さ、一緒に笠見山に行かない？」

「え！？・・・笠見山？」

笠見山は駅を出て大通りとは反対の小道を下っていったところにある山の呼称だ。

「そう、笠見山。今から行くの」

「今からって・・・どういうこと？」

「突然だと思うけど、本当は今日行くつもりなかったんだけど・・・、

やっぱり一人で行くの怖かったから・・・」

彼女は目線を下に落として言った。

一人で行こうとしていたとはどういうことだろうか。

「あの、話が見えないんだけど。三國さ・・・小夜子でいいのかな？」

小夜子は恥ずかしそうな笑みで頷いた。

なんのために行くのかという問いに小夜子は答えようとはしなかった。

ただ、一つだけわかることがある。小夜子の誘いを断る資格など私には無いということだ。

少数の蛙馬

笠見山の周辺は街灯も少なくなり、人影は姿を隠した。

すぐ横を歩く小夜子はめっきり口数が減り、後ろに見える民家から届く光が唯一の救いのように思えた。

こうしてただ目的地に向かい歩くのは幾つ年を重ねてもなれないものだ。

小夜子にこの話しを持ちかけてみようか。

まだ、若いのに何を年寄りみたいなことなどと言って笑ってくれるだろうか。

「新一君は笠見山の噂知ってる？」

小夜子は思い切って聞いた。

「・・・噂？」

笠見山には数回来た程度だが、区内民でさえ何人がその存在を知っているだろう。

「ごめん、わからないな」

新一は首を振って答えた。

小夜子はこらえきれないといったように笑った。

「何であやまるの？やっぱり変わってないね」

（小夜子はよく笑うようになった）

新一はどこかほっとしている自分がいることを感じていた。

「『少数の蛙馬』っていうんだけど、カエルに馬って書いて蛙馬」

彼女は言った。

「蛙馬^{あめ}？・・・聞いたことないな。それって生き物なの？」

「わからない。でも、いるんだって。」

夜遅くになると山のエサを求めて住処から出てくるらしいの」

「山のエサってなに？」新一は馬鹿にしたように鼻で笑った。

「わからないの。なにもわからない。

わかってることは一つだけ、出会えたら引き出してくれるらしいの」
彼女はそれっきり黙ってしまった。

笠見山のふもとまで来ると、二人は目の前の巨大な影に吸い込まれるように入っていった。

山の中は思っていたよりも、月明かりで見通しが利いた。小夜子は何かを探しているというよりも、何かが出ないことを祈っているようだった。

昔から心霊の類は嫌いだったはずだ。何故、こんなどこにでもありそうな怪談話を信じるのだろうか。

「小夜子、そろそろ教えてくれないか？」

彼女の背中に向かって聞いた。

「『少数の蛙馬』の話？」

彼女は新一の方に向き直り聞き返した。

「まず、出会えたらどうなるのか知りたいね」

木々に囲まれた不気味な雰囲気をかき消すように声を張り上げて言った。

「強い自分を手に入れられるんだって、・・・でも、たぶん会えないから安心して」

「小夜子は十分に強いじゃないか」

「違う。私、意外と弱いよ」

彼女はため息を吐きながら言った。

やっぱり小夜子は何かあったんだ。そして、小夜子が言うには蛙馬は一人じゃないと現れないらしい。
いかにも怪談話にありがちな話だ。

「でも、わからないよ。もしかしたら会えるかもしれない」小夜子を励ますように言った。

「何で？」

「だって、少数の蛙馬なんだろう？何匹もいるって事じゃないか」

「えー！何匹もいたら怖いよー」

小夜子は山に入って初めて笑った。

不思議だった。もう真夜中と呼べる時間帯なのに

月明かりが更に輝きを増し、どんどん明るくなっていくような感じだった。

しばらく進むと少し開けたところに出た。腰をかけるにちょうどいい岩を見つけると、

もう限界とばかりに私は座って見せた。しかし、視界には小夜子はいなかった。

素早く立ち上がり辺りを見渡したが、小夜子の姿は見つからない。

私は小夜子の名前を大声で叫んだが返事はなかった。どこではぐれたのだろうか。

カエルの瞳

いくら叫んでもそれは夜の闇に吸い込まれていくだけだった。歩きまわった足はすでに疲労で感覚がない。

歩いている間、色々考える。

それは、大学のことから最近のニュースのこと、そして、毎週見ているドラマのことまでと幅広く、そのほとんどがくだらないことばかり。

最終的には、これは小夜子の復讐なのではないかというアイデアさえ浮かんだ。想像の中で小夜子を非難する。

くだらない。

何より嫌いなのはこういう考えに至ってしまう自分でしかないのに。

小夜子も私を探すだろうか。これだけの月明かりだ、もと来た道を引き返すことは難しくない。

(……………なにかいる)

不意にそう感じた。何かに見られている。

数え切れないほど大量の虫が、全身をかけずり回っているようで吐き気がする。小夜子じゃない。

視線を送っている何かは、生きていない気がする。死んでいるのだろうか？

生まれてこのかた、靈的なものを何ひとつ信じてこなかった。

人は死んだらそこで全てが終わる。この得体のしれない物体を見ても考えは変わらない。

だけど、恐怖は確実にあるんだ。

（こいつは、何だ？）

姿形は馬に似ている。でも……その目はこの世のものではないかの
ように大きい。小柄な女性の顔ほどの大きさがある。

こいつが蛙馬^{あめ}か……、そう、カエルと馬、大きなカエルの目に馬
のような体。

その場に立ち尽くしていた新一は次第に意識が遠のいていくのを
感じていた。

徐々に体から力が抜けていき、昔見た夢の断片が頭の中で舞い上
がっては碎け、あいたその空間をカエルの目が凝視していた。

狂気の欠片

なにより頭痛がひどい。

誰かが持ってきた花が窓枠に生けてある。

花は淡い黄と青のコントラストに中央は白く、部屋の中はその花の香りに満たされていた。

清潔感のある部屋と言えば聞こえは良いが、ただ何もない空間が広がっているだけのようには思えた。

『無駄』に困らないスペース。

(どうやら、個室のようだ)

天井をただ、ぼんやりと眺めていると部屋の入り口のドアがサイドに開き、女性が入ってきた。

胸に江藤とかかかっている名札をつけた白衣の女性は、私を見るなり笑顔を送った。

「すいません、目が覚めちゃいました？」

江藤はその目を見開いて言った。

まだ、頭がボーッとしていて何も答えることが出来なかった。

「遠藤さん？」

江藤はベッドの隣りの椅子に腰掛けた。

「看護婦さんですか？」

新一は問い返した。

安心したように両手を軽く合わせ、江藤は身を乗り出した。

「それでも、女医です」

彼女は自慢気にウィンクした。やはりここは病院だ。しかし、何で私は入院しているのだろうか………思い出せない。

「ここはなんていう病院ですか？」

新一は記憶をたどりながら聞いた。

江藤は少し不思議そうな表情をして答えた。

「杉並病院です、覚えてないんですか？」

「覚えてないって何を？」

新一は少しイラっとした。

「昨日ご自分で歩いてこの病院に来られたじゃないですか」

江藤は少し戸惑った様子で答えた。

まるで覚えがなかった。

「笠見山で意識を失っていたらしいですよ」

霧がかっていた記憶に光が差した。全て思い出した。

笠見山で意識を失ったことも、あの奇妙な生物のことも。何もかも。

「遠藤さん？」

頭が痛い。脳の内側からノックされているようだ。江藤の声が徐々に小さくなっていくように感じた。

セカンドフェイス

『いい加減、目を覚ましな』

長い時間寝ていたようだ。先ほどの頭痛はもう消えて、女医の姿も見えない。

まだ耳鳴りがする。誰かに起こされたと思ったが、部屋のなかには誰もいない。

『ようやくお目覚めか』

「誰かいるのか？」

『俺はお前さ』

確かに頭のなかで声がした。そして、次の瞬間、意思とは無関係に右手が上がり、新一の右手はその動きを確かめるかのように細かに、まるで使い古しのロボットのようにゆっくりと握り締められた。

いや、右手だけじゃない、体のどこも自由が効かなくなっていた。

『これで信じてくれたかい？』

（どういうことだ！！）

現状に理解が及ばない。

『見たまんまだよ、そして感じたままだ。求めただろ？強い自分を』

小夜子の話を思い出した。たしか、蛙馬^{あめ}に会って強い自分を手に入れると言った。

「ふざけるな、それを求めたのは小夜子だ！」

私が声を荒げていたのを聞きつけた江藤が、急いで部屋に入ってきた。

「どうなされました？ 遠藤さん！」

江藤は私の様子を伺いながら聞いた。

「いや、何でもないんです」

自分を鎮めて答えた。

『言ってやればいいじゃないか、今自分と話していた、と』

彼がそういうと体に自由が戻った。

訳がわからなかった。二人に一度に話しかけられているような感覚。

江藤は近くで私を見ていたが、どうやら彼の声は聞こえていないようだった。

まずこの場を乗り切ることが先決だろう。

この女医はどこまで私の会話を聞いただろうか。……よし！

「……少し寝ぼけちゃって、彼女の夢を見ていたんです。こんな恥ずかしくて……絶対誰にも言わないでくださいよ」

私は照れ笑いを作って見せた。

「彼女ってさっき言ってた小夜子って人の事ですか？」

江藤は椅子に腰かけた。

（どこまで聞いてたんだ？）

「名前までしゃべってました？ 寝言なんて、疲れが溜まってるのかな」

「……遠藤さん、あまり具合がよろしくないようですけど大丈夫ですか？」

「もう少し休めば、なんとか……」

初めは少し不審がっていたが、再三にわたる私の演出が功をそう
したのか、どうやら騙しおおせたようだった。

いや、……違うな。

そもそも、バレるはずがないんだ。誰もこんなこと想像出来つこ
ない。

しかし、劇中にも彼は私に話しかけ続けた。

真意の否定

「小夜子さんってたぶんさっきお見舞いに来てた子じゃないかしら」

江藤は唇に手の甲で軽く触れながら言った。

「来てたんですか!？」

「名前はわからないけどそうだと思います。その子ならまだ院内にいると思うわ」

頭の中の寄生虫は真似て言った。

『いると思うわ』

新一は部屋を飛び出した。

走ると足がもつれる、何度もつまづきそうになりながらも走る自分を、心のなかで嘲りながらさらにスピードを上げた。

聞かなくてはならない。

彼はなんなのか。

新一は小夜子の直面している事件に巻き込まれたのだと解釈していた。

(小夜子のせいで何もかもめちゃくちゃだ)

新一は入り口近くのソファに座っている小夜子を見つけた。小夜子もちちに気づいて、大きく手を振った。

小夜子の近くまで来ると、新一はゆっくりと減速し、ひざに手を当て、大きく肩で息をした。

「新一君、無事だったんだね!良かった。びっくりしたよお、だって新一君といつの間にかはぐれて……」

「黙れ!!」

新一は小夜子の話を遮った。

小夜子はビクツと震えた。新一はしまったと思い慌てて取り繕った。

「ごめん! ひどい言い方しちゃって」

新一はソファーに腰をかけた。

「ううん、いいよ。まだ具合良くないんだよ、きつと」

小夜子は新一を慰めるように言った。

「……蛙馬^{あめ}について聞きたいんだけど」

新一は気持ちを落ち着けて切り出した。

「ああ、少数の蛙馬のことね。私の知ってることならどうぞ」

「会えたら強くなれるってどういうこと?」

新一は慎重に言葉を選んで聞いた。

「えっと、まあ、そのまんまなんだけど、正確には人格が増えるらしいの」

（人格が増える?）

「もっと正確に言うなら増えるじゃなくて、分裂する。自分にある強い部分だけを集めた人格が出来るんだって」

小夜子は思い出しながら話した。

『言った通りだろ。俺はお前だって、信じてくれたかい?』

頭の中で声が響いた。

（一一自分の人格の一部一一）

「どうしたの、まさか蛙馬に会えた?」

小夜子は少しからかうような調子で聞いた。

(そんなわけないよ、知りたくなっただけ)

言葉が出ていない？

『まあね、そりゃあ強い自分を手に入れたよ』
新一の口から思ってもいない言葉が出た。

(どうなってるんだ！？)

「へえ、新一君ってそんな冗談言えるようになったんだ」
小夜子は何度もうなずいた。

『小夜子のためだよ』

(?!)

小夜子は戸惑った様子で新一から目をそらして立ち上がった。
『正直に言うよ、あの時君をふったこと今でも後悔してる』
新一も腰を上げた。

(何を言って……)

小夜子は新一に向き直った。

「……………それって今更だよ。自分勝手もいい加減にしてよ」

(……………)

『わかってるよ。でもあの時はどうかしてた。』
駅で小夜子と偶然会えた時、運命だと思った。勝手だろ？もう、離

したくないって思ったんだ』

真実だった。反論の余地の無い真実。周囲の視線はすでに二人の意識の外だった。

「遅すぎるよ！！あれから何年過ぎたと思ってるの？

私ね、新一君を忘れるために苦労したの！駅で会ったあの時、涙が出そうに

なるくらい嬉しかったことが悔しいの！私ね、新一君が大っ嫌い！」

小夜子は目に涙を溜めて新一を否定した。

（遠藤新一って一体なんだろう。小夜子をどこまで苦しめれば気がすむんだ。

人間が、生まれて以後愚かさを競う生物なら、私は人間を極めた。死ぬべきなのか？）

『小夜子、俺は小夜子が言うように自分勝手な人間だし、そしてそれがわかっていながら

告白する卑劣漢でもある。言い訳なんてない。それが俺の全てだから』

（言い訳なんてない……全て）

『今日の夜に笠見山のふもとで待ってる』

もはや立っている事が出来ずフロアに座り込む小夜子に告げた。

しかし、そのあとに付け加えた『もし可能性が0パーセントじゃないなら来て欲しい』という最後の言葉に私は不自然な感覚を覚えた。私だったら出てこなかった言葉だ。

不確定な在り方

先に駆け足で病院を出て行った小夜子の姿を見届けた後、新一もゆっくりと歩き出した。

夜とは何時のことだろうか。もう、外は少しずつ暗くなっている。

（どこへ行くつもりだ？）

『もちろん笠見山に決まってる』新一は鼻で笑った。

（さっさと体の自由を返せ）

『返せ？それはおかしい、この体、遠藤新一は、今まで、そしてこれからも本人以外操ることは出来ないのだから』

（お前が遠藤新一だと言いたいのか？）

『そうじゃないさ、お前も俺だということを知って欲しいんだよ、俺が小夜子に言った言葉に間違いはなかっただろ？』

（……………）

笠見山の前に着いた頃には、月はその日と同じように空に張り付いていた。

（小夜子は来ないんじゃないか？）

『来るよ。：絶対に』新一は小夜子が出るであろう方角を見据えて言った。

（お前に何故わかる）

『そりゃあ簡単さ、小夜子が出た新一に「大嫌い」って言ったからだよ』

（…？）

『本当に嫌いなら面と向かってそんなセリフ言わないもんだ。：ほら、見てみるよ』

暗がりに小夜子が見えた。ゆっくりこっちに歩いて来るのがわかる。

（早く変われ！）

『……………』

（おい、ふざけんなよ！まさか、このまま変わらない気じゃないだろうな！！）

『……………』

新一は小夜子が出る間、何も答えようとしなかった。

『小夜子、来てくれないのかと思ってたよ』

「夜に待ってるって言い方が曖昧でそれが気になっただけよ。い

つまで待つつもりだったの？」

『わからないよ。でも出来るだけ待とうと思ってた』

「たぶん、すぐ帰ったと思う」

小夜子は無理に笑った。

（居づらい。でも今は逃げる体がない）

『もう一度森に入らない？今度は離さないから』そう言って新一は小夜子の手を握った。

（小夜子にさわるな！）

自分で自分に自分の体で触るなどというのは矛盾で、あまりに不自然だが今の私にはどうでもよかった。

「手をつなぐの何年ぶりかな？」小夜子は懐かしい感触に少し緊張の糸がほぐれたようだった。

「私ね、新一君に謝らなきゃいけないことがあるから来たの」
小夜子は立ち止まった。

『謝らなきゃいけないこと？』

「一つだけ新一君に嘘ついてることがあるのよ。駅で会ったでしょ？あれ、偶然なんかじゃない。
私、駅で新一君を待ってたんだ、久しぶりに会ってみたかったから……ごめんなさい」

『謝りたいのはこっちだよ』

新一はそう言うとお夜子を連れて森に入った。

しかし、あの時と違い自由に自由はない。私は小夜子が笑う度に、悔しい気持ちと嬉しい気持ちが同時に押し寄せるのをただ黙って感じているしかなかった。

分類の有無

少し山の中を歩くと、二人は月が良く見える場所に腰を落ち着かせた。

『小夜子はなんで蛙馬あめに会おうとしたんだ？』隣に座る小夜子の横顔を見て聞いた。

（確かに気になる。そういえば、駅で出会った時から時折見せる小夜子の変化に気づいてはいたんだ）

小夜子は月を見つめていた。

『言いたくないなら言わなくていいんだ』新一は小夜子の視線の先を追った。

「……言わせて、ううん、言わなくちゃいけないのよ。きっと」
小夜子は膝を抱えた。

「お父さんとお母さんが事故で死んだの。それがショックで、……認めたくなくて、だから、新しい人格に逃げようとしたのよ」
小夜子は新一を見た。

「私ってバカでしょ？」

小夜子は静かに泣いた。

（バカなのは私だ）

新一は小声で私にだけ聞こえるように言った。

『助けようなんて少しも考えちゃいない…』
(……なんだと?)

次の瞬間、小夜子の震える肩を、新一は強引に抱き寄せてキスをした。

突然の出来事に小夜子は微動だに出来なかった。
我に帰った小夜子は新一を両手で突き放す。

「なんでそういうことするの!!」小夜子は涙に濡れた表情で叫んだ。

『ここまで来たんだから、期待しなかった訳じゃあないだろ?』

(お前何を言ってる!!)

「ふざけないで!!少しでも信用した私がバカだったわ!」小夜子は急いで立ち上がって、もと来た道を探した。

その後ろで新一が言った。

『待ってくれよ小夜子、愛してるんだ、あの時からずっと』
新一は小夜子の肩に手をかけそのまま押し倒した。

(やめてくれ)

力関係を誇示するように小夜子の上にまたがり、あらがう小夜子に新一は歪んだ笑みを浮かべた。

(やめてくれ)

新一は小夜子を犯した。

私は何もすることが出来なかった。

あるのは自分に対しての激しい怒りと脱力感。小夜子は切り裂かれた衣服を身にまとってただ泣くだけだった。

惨劇の終焉に新一は言った。

『お前のやりたかったことを全てやってやったよ。満足だろ?』

(……………)

『どうした? まだ不満かい? それなら体の自由は返した。後は好きにしてくれ』

(…………ふざけるなよ! 一体何がしたいんだお前は、俺の全てをめちゃくちゃにして…………、
こんなことが俺のやりたかった事だと?)

『お前こそふざけるな!! 俺はお前なんだ、境界線をひくなよ!』

死越のやさしさで

新一は、彼の出来る精一杯の哀れみの表情で、小夜子の姿を見や
った。

私に何が出来るだろう？

小夜子のおびえ震える背中に伝えたいことは何か。伝えられるこ
とは何か。黙って立ち去るというのもある。

……それじゃあ今までと変わらないじゃないか。

でも私に何が出来る？そもそも、何か出来るなんて考える資格が
私にはないじゃないか。

なんでいつも逃げることばかり考えるんだろう。

進むことだけが正しいかどうかなんてわからない。

人生の数ある選択肢のなかの一つ。

私の求めていたもの。

………全てを打ち明けよう。

同じ高校に進学したのは偶然じゃなかったこと。中学から高校を
経て、そして今に至っても、私は小夜子のストーカーだ。

結局、偶然なんて何もなかった。

再会によって蘇ったのは、忘れようとした歪んだ愛だった。小夜
子をふったのは、ただ愛を確かめたかっただけなんだ。

全ては変えたい過去。

助けて欲しい。小夜子は許してくれるだろうか。

『どうしようもない奴だ。この後に及んでも、まだ、助かる気でいるのか』

（……助けてくれよ。お前と俺は一人なんだ。そうだろう？）

『…………一緒にするな』

（なん…だよそれ、なあ、見捨てるなよ。怖いんだ。怖すぎる）

『見てらんないよ。俺は消える。お前と一緒になんてごめんだからな』

これ以後、彼は二度と私の問いかけに応えることはなかった。

無様なもんだ。自分にさえ見捨てられる。

わかってたんだ。俺には先に進む資格なんてない。

だから、今回だけは許して欲しい。

「小夜子、全てを聞いてください」

たとえ、この告白が小夜子を更なる死地へ追い込むことになっても

「…僕はあなたのストーカーでした…」

初めて語る本音。

「…だから、あの時のことも…」

これからが真実。

偽りのフェイスはもう無い。

死越のやさしさで（後書き）

読みにくかったと思いますが、最後までお付き合いくださいありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7676a/>

レンタルフェイス

2011年1月30日03時33分発行